

シャクシャインの戦い

地域産業
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

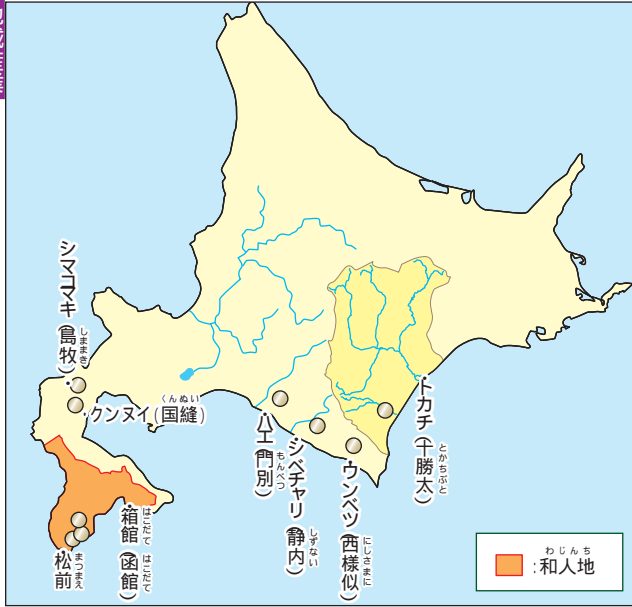
第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



17世紀前半ころまでに、金がとられるようになったところ(●)。
(参考:『アイヌの歴史と文化』より、改変)

松前藩の交易支配が始まり、「場所」(p137)が決まれば、アイヌ民族は自由な交易ができなくなっていきます。

「場所」によっては、アイヌの産物が松前藩によって安く買いたたかれます。例えば、それまで干しザケ100本に対して、米を2斗受け取っていたものが、0.7~0.8斗と三分の一近くにまで安くされることもありました。

また、強制的に大量の産物を約束させられ、出せなければ子どもを人質に取られる、といったことまで、おこなわれたようです。

さらに、松前藩にとって大きな収入源であった、タカと砂金をとりに、和人たちがアイヌ民族が生活しているところに入りこみはじめます。十勝でも1635年には、歴舟川下流周辺(大樹町)などで砂金とりがおこなわれています。

こうした、和人のひどいやり方や、生活地域への侵入が、各地でアイヌ民族を苦しめていきました。



シャクシャインとオニビシの力の広がり。
(参考:『アイヌの歴史と文化』『十勝二万年史』より、改変)

始まりはアイヌ民族同士の争い

1648年のころから、シベチャリ(新ひだか町静内)地方の人たちとハエ(日高町門別)地方の人たちが、アイヌ民族同士で争いを続けていました。狩りや漁をする範囲(イオル)の争いでした。

1653年には、シベチャリのリーダーであるカモクタインが殺され、1668年には、ハエのリーダーであるオニビシが、シベチャリの新リーダーとなったシャクシャインたちによって殺されます。

そんな中、1669年、オニビシの親せきであるウタフが、松前藩に武器などの援助をたのみにいきますが、断られます。その帰り、ウタフは死んでしまいます。病死だったようですが、アイヌの人々には、松前藩による「毒殺」だと伝わりました。

シャクシャインの呼びかけから

ウタフ「毒殺」を聞いたアイヌ民族には、和人に対する不安が広がります。もともと、和人のやり方への不満やいかりもありました。そこへ、シャクシャインが、

「アイヌ同士の争いはやめ、ひどいことをし続ける和人に対して戦おう」と広く呼びかけました。

1669年6月から7月にかけて、東は白糠周辺、北は増毛周辺に至るまで、アイヌ民族が和人に対して戦いを始めました。十勝でも戦いが起き、和人ら20人が殺されました。

これに対して江戸幕府は、松前藩だけでなく、弘前藩など東北地方の藩に対しても出兵を、またはその準備をするよう、命令を出しました。



●: 和人がおそわれたところ。地名は地方や「場所」の拠点名。
(参考:『アイヌの歴史と文化』『十勝二万年史』より、改変)

1 2斗(2と): 今、1斗=約18リットルなので、2斗は約36リットル。時代や地方によって少しずつ変化する。ちなみに1斗=10升(しょう)、1升=10合(ごう)、米10kgが約6.6升なので、2斗は10kg入りの米袋、約3袋分。

まつまえはん はんげき
松前藩の反撃

7月末、松前藩は鉄砲をそろえ、オシャマンベ（長万部）までせめこみますが、アイヌ軍は山中にかくれて毒矢を放ちます。

せめあぐねた松前藩軍は、クヌイ（国縫・長万部町）までしりぞきました。

9月、松前藩は軍を増強し、海をわたるなどして総攻撃を始めます。それと同時に、松前藩とかかわりの深いアイヌ民族に対して、個別におどしをかけ、切りはなしては降伏させていきます。

アイヌ軍は分断され、シャクシャイン勢は追いつめられていきました。



オシャマンベ(長万部)、クヌイ(長万部町国縫)、シベチャリ(新ひだか町静内)と、シャクシャインが殺されたピボク(新冠町字高江)。(参考:『アイヌの歴史と文化』より、改変)

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展そして未来へ

用語

さくいん

だまし討ちで殺されたシャクシャイン

10月、松前藩軍は、シベチャリ（新ひだか町静内）のシャクシャインに対し、静内川・新冠川をはさんだピボク（新冠町）に陣地を張ります。現地指揮官である佐藤権左衛門はシャクシャインに対し、戦いをやめることを提案します。シャクシャインは迷いますが、受け入れることにしました。

その夜、シャクシャインらは「仲直り」の宴会に招かれます。シャクシャインとその供たちが酒に酔ったところを、突然、松前藩兵が取り囲んで殺しました。だまし討ちだったのです。

そして権左衛門らは、次の日、シャクシャインのチャシ（砦）： p116)を一気にせめ、焼きはらいました。

その後、アイヌ側の勢いは弱まっていきます。翌々年の1671年春、ついにシャクシャインの戦いは終わりました。



もう少し細かいこと

寒かったところで、噴火もあった

16～17世紀ころは、その前後に比べて寒い時期でした。この時期は「小氷期」と呼ばれています。(p103)

また、1640年には駒ヶ岳（鹿部町・森町）が、1663年には有珠山（壮瞥町・洞爺湖町・伊達市）が、1667年には樽前山（千歳市・苫小牧市）が噴火をし、多くの死者が出ています。とくに樽前山の噴火は、その火山灰が十勝まで飛んできているほどの大きな噴火でした (p61)。

これらのことは、北海道の自然に対しても影響があったでしょう。自然とともに生きるアイヌ民族にとって、物質的にも精神的にもダメージがあったのではないのでしょうか。

あくまで想像ですが、松前藩による交易独占などの政策のほか、こうした自然現象も、シャクシャインの戦いが起きる背景となっていたのかも知れません。

新ひだか町の「シャクシャイン記念館」

シャクシャインの本拠地であったシベチャリ（静内）は、今の新ひだか町にあります。

この新ひだか町静内真歌の真歌公園には「シャクシャイン記念館」や「アイヌ民俗資料館」もあり、静内を中心としたアイヌ文化について知ることができます。

また毎年、「シャクシャイン法要祭」がおこなわれています。



シャクシャイン記念館。



アイヌ民俗資料館。

2 だまし討ち(だましうち): だまし討ちは、アイヌ民族との戦いで、和人が何度もおこなっている。松前氏となる前の蠣崎 かきざき 氏は、1515年のショヤコウジ兄弟との戦いの時に、また、1536年のタリコナとの戦いの時に、いずれも仲直りを呼びかけ、その祝い

の場でごちそうや酒をふるまい、よったところでせめこみ殺している。同じようなことは、四国の土佐藩(高知県)でも起きていて、よその土地から来て支配者となった山内氏が、地元の有能な武士を相撲大会に呼びだし、そこでみな殺しにしている。